

# 「あわせ」をめぐる探索的研究

## — 遠慮と察しのコミュニケーションを再考する —

伊藤 明美

### 1. はじめに

Ishii (1984) が「遠慮と察しのコミュニケーション」をモデル化して以来、日本人のコミュニケーションは、遠慮という文化フィルターをすることで簡略化・減量化される発話を互いに察しあう行為であり、ひいてはそれが文化としての対立回避傾向につながっていると信じられたきた。21世紀に生きる若者ですら場の空気を感じ取ることができない人間を KY と揶揄するが、それは察する力を重視する日本人のコミュニケーション姿勢の表出ともいえる。こうした考え方は、文化人類学者 Hall (1976) が示した高・低コンテクストの概念による理論的な裏付けによって、その学術的地位を維持してきた。石黒 (2006) の論考にみられるように、察しに紐づけた日本人の対立回避傾向にかかる研究は、上記 Hall の理論から半世紀以上を経た現在でも、依然、健在である。

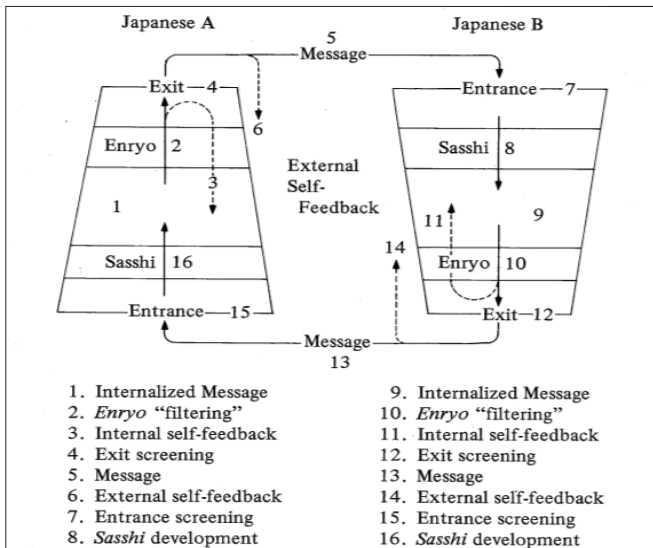
一方、コミュニケーション行為としての「察し」について実証的に検討した研究は、管見の限りわずかである<sup>1)</sup>。本論では、これまで広く信じられてきた察しに検討をくわえるとともに、日本人の対立回避傾向を支える行為として、目の前の相手にあわせてみせること（以後、「あわせ」と呼ぶ）の可能性について考えたい。行為の検討にあたっては、異文化コミュニケーション研究の視点から英語圏における類似概念である「白い嘘」を取り上げるとともに、LINE メッセージにみられる大学生のあわせ行為の実態を示しつつ、その文化的特徴を探索的に考察する。

### 2. コミュニケーションにおける日本人の察しについて

#### 2.1 察しの文化的意味とその実践をめぐる日本社会の変容

本節では「遠慮と察しのコミュニケーション」モデルで示される察しの意味と、その実践を支えた社会・文化の変容について検討してみたい。前述のように、日本における察しとコミュニケーションの関係をモデル化したのは、Ishii (1984) であった。図1からわかるように、このモデルでは「遠慮」という文化フィルターを通して、言語・非言語による話し手の意向やおもわくが簡略化・減量化される。発話者Aの出口(Exit)が狭く描かれているのは、こうした理由によるものである。簡略化・減量化された発話者Aのメッセージは、あいまいかつ多義的になることが多く、その真意を理解するため(あるいは察するため)に、受け手Bは考えうるあらゆる情報を最大限に利用しながら聴かなくてはならない。それが広く描かれたBの入口(Entrance)によって示されているのである。換言するならば、察しは謙虚さを美德とする日本人の価値観に対応するためのコミュニケーション・スキルだといえるだろう。

図1 遠慮と察しのコミュニケーションモデル



出典 S.Ishii (1984, p.57)

一方、実際に話し手の発話意図を正確に推察するためには、聞き手が解釈に必要な様々な状況要素を瞬時に、また、的確に取捨選択する必要があり、また、それを可能とするためには話し手と受け手が高い水準でコミュニケーションのコンテクストを共有していなくてはならない。

コンテクストの重要性とその文化差について論じた Hall (1976) によれば、日本は高コンテクスト文化を代表する社会であった。対人コミュニケーションにおいては、メッセージを正しく解釈するための情報が受け手と状況のなかに、あらかじめプログラムされているということである。長い間、日本では人びとの移動が限定的で、会話の相手は社会・文化的な意味において類似していた。つまり、「察しのコミュニケーション」が機能してきたのは、個人にとって身近かな集団（たとえば家族、学校、職場などの「ウチ」集団）に属する相手だったということである。

留意が必要であろうことは、明治以降、ことに太平洋戦争後の日本は米国的価値観にもとづく西洋諸国の文化要素を生活のいたるところに取り込みながら、社会は今なお変化し続けていることである。同時に人びとの職業、生活形態、ジェンダー、人種・民族等、現在の日本社会はあらゆる側面で多様化が進み、コミュニティも流動化している。同じ地域で長年暮らす隣家の人であっても、互いに共有する情報は豊富だとはいえ、表層的で深まりのない会話に終始することが多い。

日本は、もはや高コンテクストな文化を代表するような社会とはいえない。「察しのコミュニケーション」を醸成した重要な要素の一つに、人びとの移動が極めて限定的であった徳川時代から続く日本人の血縁関係をベースとした自給自足型の小規模な稲作農業とその生活スタイルがある (Ishii, 1986) とすれば、なおさらのことである。農業を基本とする日本人の生活スタイルは大きく変容した。橋本 (2000) によれば、戦前まで維持されてきた一家の世代交代による農業従事者は、1980年ころになると、少子化によって「あとつぎまでが農外に就業する兼業深化の傾向 (p.115)」が生じており、1995年時点ですでに「自営小農態勢は崩壊に近

づいているというほかない (p.132)」といった状況にある。また、2020年度現在では、稲作を含む農業従事者は152万人（うち49歳以下は22.7万人）であり（JA com 農業協同組合新聞）、全就業者6,676万人（総務省統計局）のわずか2.27%しかおらず、しかもその担い手の多くは高齢者となってしまうのである。

苦情をめぐる消費者と従業員の会話は、日本人のコミュニケーションにおける低コンテクスト化を示す好例である。池内（2020）は、苦情申し立てをする消費者の怒りをエスカレートさせているのは当初の苦情内容そのものではなく、対応する従業員のコミュニケーション上の態度だと述べた。苦情は、怒りをベースとした「他人」との、「顔」がみえないコミュニケーションであり、遠慮がない分、発話の減量化は起こりにくい。にもかかわらず、対応する者は消費者の心のうちが読めていないのである。むしろ企業側も損失を最低限に抑えようとするため、苦情を申立てる消費者の意向を簡単には受け入れないこともあるだろう。しかし、もし、日本が依然、高コンテクスト文化を維持しており、また、そうした文化を背景に察しのコミュニケーションが機能している社会であれば、従業員の態度が消費者の怒りに油を注ぐといった事態は避けられるはずである。

## 2.2 察しの真相

察しのコミュニケーションは、日本語の持つ特徴とともに論じられてきた。日本語での会話は、一般に主語・主部、時には述語・述部までも省略されることがある。日本語を母語としない人びとにとっては甚だしく情報が欠落しているように響くが、たとえば「行くの?」「寒い?」「がんばったね」「そんなにうまくいくとは」などの口頭表現は日常的に利用され、話し手の意図も十分に伝わる。

一方、省略された主語・主部や述語・述部を補って、相手の意向を理解してみせるのは、必ずしも日本人に特有な能力とはいえない。たとえばテーブルをはさんで座った2人のうち1人が相手にむかって「お名前

は？」と尋ねたとしよう。名前を問われた対象や名前を聞く（あるいは聞かれた）理由も明らかで、2人の間に社会的勢力の違いがあるような状況下にある場合は、英語であっても“Name?”だけで会話は成立する。一般にこうした英語表現は相手に対する非礼こそ問われるが、質問を受けた相手が「自分の」名前を問われていることは理解できるのである。換言すれば、この場合、英語では主語と動詞を含む「正しい」文章を用いて表現するのが相手に対する礼儀だと考えられ、日本語ではむしろ、意味が伝わる限界まで語句を省略した方が礼儀にかなうといえなくもない。

「そんなにうまくいくとは」など、否定形の述語が省略される場合も同様である。このような表現が利用される時は、述語として「思わない」が想定されていることを双方が了承済なのであって、聞き手の察し能力が問われているわけではない。そもそもこの場合の「…とは」は、「…なんて」と言い換えが可能で、意外で信じられない気持ちを表しており、この後に「思う」などの述語が続くことはないからである。話し手が否定形の述語を省略しても、聞き手にはその省略の事実が明瞭に伝わる仕組みを、日本語は備えているといえるだろう。

くわえて話し手は、発話の意図や目的を言外に込めることが多々ある。「今、何時？」や「今日、ひま？」に対する答えは、それぞれ「3時だよ」や「そうだね」などが期待される隣接ペア<sup>2)</sup>であるが、状況によってはまったく別の返事が期待される。たとえば会議が普段の倍以上に長引いている時に発せられる「今、何時？」は、そろそろ会議を終えてもらいたいといった意図が隠されている可能性が高く、また、明らかに憔悴した表情の友人が「明日、ひま？」と聞くのは、話があるので時間を作ってほしいという意味になりうる。多くの人はいくつかの状況要素を瞬時に理解して、「もう、こんな時間ですか。そろそろ（会議を）終わりにしましょう」・「もう少しだけ我慢してください。すぐに終わりますから」や、「大丈夫？」・「じゃあ、帰りにいつものカフェで」などのように答えることだろう。このような返答は、隣接ペアとされる会話の枠組みをはみ出すもの

で、返答の判断は相手の置かれた状況を推測する力、すなわち察しによるものである。

しかし、こうしたやりとりを可能にする能力についても、日本人に特有とはいえ、また、その能力が他の言語話者に比べて格段に高いともいえない。人は母語にかかわらず相手が発する言葉の外側にある意味を解釈しようとするし、それが人間関係の維持や強化につながっていることだろう。つまり、察しは他者とともに生きる宿命を背負った社会的動物としてのヒトがもつ普遍的なコミュニケーション・スキルの一部ともいえる。

察しがすぐれて日本人に特有のコミュニケーション行為だとされてきた理由の一つは、明治維新とともに始まった日本の近代化が西洋諸国への憧れとその理想化によって成し遂げられたことにあるだろう。特に太平洋戦争以後は、いきおい米国的価値観が日本的価値観を凌駕し、日本の対外政策もアメリカ中心となるなかで、コミュニケーション研究の比較対象として取り上げられるのもまたアメリカ人が話す英語（米語）であったことは否めない。

刈谷（2017）は「西洋諸国への追いつき型近代化の過程では、日本の後進性ゆえに『西洋にあるものが日本にはない』とされる（pp.215-216）」欠如理論的な思考様式が、近現代の日本人にはあると述べた。Isshii（1984）による遠慮と察しのコミュニケーションモデルは、必ずしも欠如理論に立脚したものではなかったが、少なくともそれはアメリカを筆頭とする西洋諸国の言語とコミュニケーションを比較対象に置いたものであったように思われる。察しのコミュニケーションは、「われらにあって、かれらにない」というアンチテーゼを含むが、この論理の枠組みは欠如理論と同じである。「西洋にあるものが日本にはない」と「日本にあるものが西洋にはない」という論理は、欠如理論の裏表にすぎないからである。

1980年代に示された Ishii の論考によって、日本人は日本人としての誇りを取り戻したのかもしれないし、また、同時にそれは、西洋諸国におけるコミュニケーション研究者に新たな視点を提供することにもつながった

といえるが、簡略化・減量化された日本人の発話が察しあうことによって成立しているとするには、いささか材料不足の感は否めない。

### 3 あわせについて

#### 3.1 あわせ、協調、同調

ここでは対人コミュニケーションにおけるあわせについて検討したい。個人主義化がすすんでいるようにみえる日本だが、その一方で、若者たちが相手の意向・おもわく・感情等に自らの言動をあわせようとする 것도、依然、少なくはない。たとえばKY（空気が読めない）という新語が2006年ころに登場し、翌年には流行語となった（稲増，2008）ことは記憶に新しい。山本七平の『「空気」の研究』は1977年に出版されたあわせ研究のプロトタイプともいえるものだが、コミュニケーションが生起している状況を自らが共有し、他者視点で会話ができない人間、すなわち場の雰囲気「あわせることができない」人間は、現代の若者にとっても失笑や攻撃的になっているのである。

「あわせる」という動詞は、複数の事象を一つにすることを意味する。ただし、そこには自分が目の前にある複数の事柄を一つにするという意味もあれば、調和や安定を求めて自分が対象（人の場合もあれば環境などの場合もある）に寄添うことで一つになるといった意味もある。日本人のコミュニケーションで利用されるあわせは、後者の意味で利用されている。『広辞苑 第7版』では後者の使用例として「身のほどにあわせる」「収入にあわせた生活をする」「高めのボールにバットをあわせる」などが紹介されているが、対人コミュニケーションにおけるあわせは、自分とは異なる相手の言動に、言葉や態度、行動で賛意や共感を示すことといえるだろう。

また、日本にはあわせと類似した概念として協調や同調がある。協調は、「①利害の対立した者同士が、おだやかに相互間の問題を解決しようとする。②性格・考え方などの異なった者同士が、互いにゆずりあっ

て調和していこうとすること」(『広辞苑 第7版』)である。協調の前提には、コミュニケーションをおこなう当事者双方に、意見の違いに対する認識と妥協があり、両者が歩み寄る行為であることがわかる。

一方同調は、「他人の主張に自分の意見を一致させること」(『広辞苑 第7版』)である。また、心理学ではその行動についてより詳しく研究されており、「ある集団成員の意見や判断や行動などが他の成員のものと異なっている時、他の成員のそれに合致するように自分の意見や判断や行動などを変化させること」(『改訂新版 社会心理学用語辞典』)と説明されている。

これら2つの概念定義や説明からわかるのは、協調が双方向型のコミュニケーション行為であるのに対し、同調は片側通行型であることだろう。また、同調は自分の主義主張や信念等を意に反して抑え込む行為であり、「同調圧力に屈する」などの表現にみられるように否定的な意味で利用されることが多い。そのため、時に同調は人を自己嫌悪に陥らせたり、落胆させることがある。あわせは相手の意向に沿って自分の考えや態度を曲げるといふ点からすると、同調との親和性がより高いといえるものの、それは自らの内部に生じる自然な他者への配慮を基にしているという点で、同調とも一戦を画する行為であるといえる。

### 3.2 白い嘘とあわせ

あわせと類似する行為は、異文化圏にもみられる。今回はその一例としてアメリカなどの英語圏における“white lies”(以後、白い嘘と呼ぶ)を取り上げたい。ロドリゲス・ライヴ(2006)はアメリカの大学生を対象に調査を行い、かれらの多くが頻繁に白い嘘をつき、また、嘘の大半は相手に対する配慮から自然発生的、かつ、容易に生み出されていると指摘した。

対人コミュニケーションにおける白い嘘は、「他人の感情を傷つけることを避けるためにつく、無害な、またはささいな嘘のこと」と定義されている(Oxford English Dictionary, 原文:A harmless or trivial lie, esp. one told



in order to avoid hurting another person's feelings)。この嘘は、自分の意向や主張を曲げる言動だけを指す概念ではないが、それを含む行為であることに間違いはない。たとえば、食事に誘われた人物が、誘った人物に対して、予定もないのに「その日はすでに予定が入っている」と断るのは嘘であるが、自宅で食事をご馳走してくれた友人から「美味しかった？」と聞かれ、実際はそうでなかった場合でも呼んでくれた友人に対する配慮やマナーとして「美味しかった」（あるいはこれに類似した表現を使う）と答えるのは、あわせである。

白い嘘をテーマとしたこれまでの研究を整理した Hart (2020) は、この特別な嘘の背景には「気働き」「心理的補償」「権力格差」「関係の安定的維持」の4動機があるとして、それぞれの動機にもとづく代表的な嘘を示した(表1参照)。具体例をみればわかるように、英語を母語とする人びとの白い嘘は、心理的補償を動機とするものを除けば、日本人のあわせと酷似していることがわかる。

表1 白い嘘の動機と嘘の具体例

1	気働き (tact) : 相手の気持ちを考え、礼儀正しくふるまうこと (e.g. デートはつまらなかったが、相手には「楽しかった」という。)
2	心理的補償 (psychological compensation) : 自尊心を守ること (e.g. 恋人にフラれたが、「お互い様だった」という。)
3	権力格差 (power difference) : 社会的上位者の意向にしたがうこと (e.g. 残業はしたくないが、上司に対しては「喜んで」という。)
4	関係の安定維持 (relational stability) : 対立を避け、良好な関係を維持すること (e.g. 妻が信じる宗教を自分も信じているふりをする。)

Christian L. Hart(2020). The Nature of Deception: What Is a White Lie? Certain features distinguish white lies from big lies. から筆者作成

一方、あわせが白い嘘と決定的に異なるのは、その行為が刺激する罪悪感のレベル（あるいはその有無）であろう。白い嘘の上位概念は嘘である。嘘をつくことなしに人生を送ることのできる人はいないものの<sup>3)</sup>、他者を欺くことは悪しき行為であり、アメリカ人がその罪悪感から逃れることは難しい。キリスト教徒が多く、またその宗教的伝統に影響されてきた

国の一つであるアメリカ<sup>4)</sup>では、人々の嘘に対する嫌悪感は極めて高いと考えられる。聖書では嘘をつくことを厳しく戒めているからである。

前述のロドリゲス・ライヴ (2006) は、調査協力者となったアメリカ人の大学生が自分のつく嘘の多さに驚いていたと述べる。驚きの根底にあるのは、頻繁に悪事をはたらいていること (嘘をつくこと) への罪悪感だと考えられる。およそ同じ行為であるにもかかわらず、日本ではあわせの研究が皆無であるのに、海外では白い嘘にかかわる記事や研究が散見される<sup>5)</sup>のは、この概念が持つパラドクシカルな2つの側面、つまり社会的な許容と罪の意識があるからだろう。

Hart (2020) は、「白い嘘と本当の嘘の区別は、嘘そのものではなく、むしろ嘘が相手に与える心痛の程度である」(原文: The distinction between a white lie and a real lie is not an objective feature of the lie itself but rather a measure of the sting the lie imparts.) と述べ、同時に、嘘の白さは「視点の問題だ」と付け加えることも忘れなかった(原文: It is important, though, to bear in mind that the whiteness of a lie is a matter of perspective.)。嘘をつく当事者が「白」だと思っけていても、相手がそれを知ったときに、裏切りや二枚舌と理解されることもあるからだ。つまり、嘘をつく人間が相手に対する配慮として虚偽の発言をしたとしても、それが露見し相手が心痛や怒りを覚えることがあるとしたら、それはもはや「取るに足らない、小さな嘘」ではなくなるし、また、「礼儀作法」としても機能しないということである。そして、おそらくはその可能性ゆえに、アメリカ人のような英語母語話者が白い嘘をつくことの罪悪感から完全に解放されることはないといえるだろう。

### 3.3 あわせの文化的背景

#### 3.3.1 平等、個人主義、緩やかな集団志向性

遠慮というフィルターを通して減量化されたアウトプットは、実際には受け手の正確な推論にはつながらないという仮説に基づけば、日本では減

量化されたことによるあいまいな発話を許容する態度を基礎とした「あわせのコミュニケーション」がおこなわれていると考えることができる。日本ではあいまいな相手の意向や考えをあえて明確化することはせず、むしろ、発話をそのまま受け入れて肯定する（あわせる）ことによって、対立を回避しようとしてきたのではないだろうか。

日本人の対立回避傾向は、文化的に未熟な幼い子どもたちをのぞけば、性別、居住地域を超えたコミュニケーション特徴でもある。10代の若者たちも例外ではない。たとえば辻（1996）は、あいまい化する若者語について、互いを傷つけないための「予防としてのやさしさ」による対人摩擦回避の方略とみており、そもそも若者たちは強い・濃い人間関係を望まない傾向にあると述べた。「強い・濃い」人間関係とは、この場合、明確な主張をぶつけ合うことで互いを知るプロセスと、そこで生まれる絆が育む関係であろう。

「とか」「みたいな」や半クエスション<sup>6)</sup>を用いることで、自分が強い・濃い人間関係を指向する者ではないことを言外に聞き手に伝える。これを聞き手が受け入れれば、その相手とは摩擦のおきにくい互いを傷つけない対人関係をもつことができる。聞き手が受け入れなければ、その相手は互いを傷つけかねない強い対人関係を指向する人物なのだから、そういう相手と対人関係をもつことを予め避けられる。(p.54)

また、寿命の短い若者ことばのなかにあって、あいまい表現のいくつかは長期間にわたり利用され、定着している。上記、「とか」「みたいな」をはじめ、「感じ」「かも」などはいずれも既に規範的に利用されている（桑本，2013）ことは注目に値する。つまり、このような表現はすでに「大人語」として機能しており、強い・濃い人間関係を望まないのは日本人全体の対人志向を指すともいえるのである。否、そもそも日本人はそうした関係を望まず、それゆえ相手に遠慮してきた。遠慮という文化フィルターを

通って簡略化・減量化された主張を聞いた受け手は、相手の発話をあいまいなまま受け入れて、ひとまず「あわせておく」ことで人間関係を維持してきたのであろう。

こうしたコミュニケーション傾向を集団主義の表れとみなす向きもあるが、そうともいえない。たとえば高野（2008）は、「日本人が集団主義的」であるという通説が事実なのかどうかを確認するために心理学、言語学、経済学、教育学など幅広い学問領域における実証的な研究を調べたところ、日本人は、欧米人より集団主義的だとはいえないと述べた。具体的には、日本人とアメリカ人を対象として集団主義と個人主義の程度を比較した心理学的研究22件中、日米で差はないとするものが16件、また、むしろアメリカ人の方が集団主義的としたものが5件あったと報告している。さらに、新聞や雑誌に掲載されたエピソードを調べたところ、集団主義的な日本人を表すエピソードとともに、個人主義的な日本人や集団主義的なアメリカ人を表すエピソードも多数みつかったと述べ、これまでの日本人論の多くが個別のエピソードを主な論拠にしてきたと批判した。

また、山岸（1990）によれば、日本における集団主義の実態は相互監視と相互規制の社会構造を背景とした「利他的利己主義」である。日本人は自分が他人のために行動し、それに応じて他人も自分のために行動してくれることが期待できれば、コストがかかっても利他主義的な行動をとるのである。「残業はしたくないが、上司に認められる／給料がよくなる」「ボランティアに興味はないが、就職や進学に有利」などの場合、表向きは所属する会社や社会のためとみえる行動をとるが、実際には自己犠牲と自己利益を天秤にかけた結果として、後者の比重が大きかったというだけのことである。しかも所属する集団内で多くの人が残業をし、ボランティアをしているとすれば、相互監視・相互規制がより強く働くことになり、同様の行動をとる人が増えることになるだろう。

さらに大橋（2006）は、放送大学に在籍する350人の出身も年齢も多様な学生を対象に、縦型／横型—個人主義／集団主義の4つの尺度を用いた

統計分析をおこなった。その結果、最も得点が高かったのは横型個人主義（個人主義かつ個人間の平等を重視）であり、また、2番目に得点が高かったのは横型集団主義（個人間の平等を重視する集団主義）であったと述べる。3番目に得点が高かった縦型個人主義（権力差を容認する個人主義）と2番目の得点差は極めて大きく、その差は性別、居住地、年齢を問わず、すべて統計的に有意だったという。つまり、現在の日本は平等が重視される個人主義志向が認められる社会であり、個人間の平等が脅かされない程度に集団主義的にもなることがある、ということだろう。ホフステードら（2013）がおこなった76の国と地域における個人主義指標でも、日本は35位という結果であり全体のなかではおよそ中間地点に位置づけられている。

相互監視・相互規制をもつ社会構造のなかで平等重視の個人主義を維持しようとするれば、相手に批判を浴びせることを避け、不明瞭な相手の発話も一旦は受け入れわかったふりをするあわせのコミュニケーションが醸成されるのは、ごく自然な成り行きであったように思われる。互いに遠慮しながらも自らの意向を伝える機会を保障するためである。また、前述したように、相手にあわせるために自分を偽ることにに対して日本人は罪悪感を覚えることはない。なぜならそれは、相手の意向やおもわくを一旦は認め、<sup>レ</sup>る行為として認識されることにくわえて、嘘をつくことに対する強い宗教的戒めとでもいうべきものを持ちあわせないからである。

### 3.3.2 女子大生のあわせ

ここではあわせの実態を探るためにおこなった調査の一部を紹介し、検討を加えたい。調査はロドリゲス・ライヴ（2006）が提唱する系統的自己観察法を利用した。これはコミュニケーター自身の分析と報告が基盤となる研究手法であり、社会・文化的に抑制され、外部からは観察不可能な個人的な経験にアプローチすることを可能にするため、文化的行為としてのあわせ分析に最適と考えたからである。調査対象として協力依頼をしたの

は筆者が担当する異文化コミュニケーションゼミを履修する学生であり、協力は任意とした。

最終的に22人の学生から協力を得た。学生たちには過去3日分のLINEメッセージのやりとりの記録を振り返ってもらい、自らがあわせと考えるメッセージを抽出してもらった。あわせの前提として示したのは、相手と自分の意向が異なることである。報告書提出にあたっては、具体的なあわせメッセージと、その前後におこなわれたメッセージ交換の正確な記録のほか、それが生じた時の状況説明と、あわせた理由を書いてもらった。さらに個人の特定につながらないように、自己分析の記録は匿名とした。具体的にはこれまで利用したことのない新しい（誰も知らない）ニックネームを創るよう依頼した。

報告されたメッセージのうち分析対象としたのは、上記した前提を無視するなどの不備があったものを除く149件であった。1人平均6～7件のあわせ行為が報告されたことになる。その後、Hart (2020) による白い嘘の4動機を参考に全体を分析した結果、女子大生のあわせ行為の大半は友だち・知り合いに対する「気働き」であることがわかった。具体的には149件中112件（全体の75.16%）である。女子大生が交換するLINEメッセージの相手が友だち・知り合いであることは容易に想像でき、このような結果は自然である。次に多かったのは「関係の安定的維持」であり、対象は母親を筆頭とする家族であった。このカテゴリに入るメッセージの件数は26件（全体の17.44%）であった。また、アルバイト先の上司やサークル・部活の先輩などが対象となる「権力格差」を動機とするものは11件（全体の7.38%）のみであった。

一方、行為の動機や対象となる人物にかかわらず、女子大生のLINE上でのあわせには、その場かぎりともいえる「やりすぎし型のあわせ」と、メッセージ送信後に生じる自らの不利益行為が想定された「自己犠牲型のあわせ」の2種類が確認された。より具体的には、自己犠牲型が91件（全体の61.07%）で、やりすぎし型を31件上回る結果となった。女子大生の

多くが発するあわせメッセージは、嘘の共感を示すだけでなく、程度はどうあれ自分を犠牲にする行為をとまなうものであることがわかる（表2参照）。

また、あわせの3動機とこれら2種の形態についてFisherの正確確率検定をおこなったところ、動機別のあわせ形態を対象に有意な差が認められた（ $p=0.0032$ ）。また、3動機の群間比較についてHolmの補正を行った結果、気働きと関係の安定的維持の間、気働きと権力格差の間にそれぞれに有意差があった（ $p=0.043$ と $p=0.046$ ）。女子大生のあわせ行為は、動機の種類（気働き、関係の安定的維持、権力格差）にかかわらず自己犠牲型が多く、同時に家族や社会的上位者より、むしろ友だち・知り合いを対象とした気働きが多いといえる。

表2 女子大生のあわせ

動機 (対象)	気働き (友だち・知り合い)	権力格差 (上司・先輩)	関係の安定的維持 (家族)	
やりすぎ型のあわせ	52件	1件	5件	58件 (38.9%)
自己犠牲型のあわせ	60件	10件	21件	91件 (61.07%)
件数の合計	112件 (75.16%)	11件 (7.8%)	26件 (17.44%)	149件

以下に具体的なメッセージの例をあげつつ、女子大生によるあわせ行為を考察する。

なお、<>で括ったアルファベットは人物の別を示す（以下に紹介するメッセージは、すべて異なる人物から報告されたものである）。状況説明後の（）内はあわせメッセージを送った理由、「」で括った文章は、実際に女子大生が相手に送ったメッセージである。なお、状況説明および理由については、報告書の記載に即して一部筆者が簡略化したものもある。

#### 気働き（対象：友だち・知り合い）

##### ① やりすぎ型のあわせ

<A> ジャニーズが好きな友人から、かれらが出演しているある番組を見てくれと依頼され、実はほとんど見ていないのに、(相手の気持ちにのっかりたくて)「待って見てたわ!!!!」とあわせた。

<B> 私が紹介した映画の感想を友だちが送ってくれた。(その内容は納得しかねたが、わざわざ感想まで送ってくれたので)「激しく同意!」とあわせた。

## ② 自己犠牲型のあわせ

<C> 友だちに「遊ぼう」と誘われた。(テスト直前で本当は断りたかったが、相手に悪いから)「いいね、遊ぼう!!」とあわせた。

<D> 近く出席する成人式で一緒に写真を撮ろうといわれた。(撮りたくなかったが、断りづらく)「おけ!!!」とあわせた。

「やりすぎし型のあわせ」では、本心を隠して偽りのメッセージを送っている。それは相手の気持ちに寄添うことを目的としたものであるが、だからといって自分を犠牲にするまで利他的というほどではない。一方、「自己犠牲型のあわせ」はメッセージ送信後に対応せざるをえない不承不承の行為がともなうことがあらかじめ想定されている。実際、Cはテスト前に友だちと遊び、Dも結局、友だちと写真を撮ることになるだろう。こうした自己犠牲型のあわせメッセージは、気働きとしてカウントされた112件のメッセージの中で60件(53.57%)にのぼっており、統計的にもやりすぎし型より高い頻度で生起していた。

また、あわせの理由としてあげられたのは「断ると悪いから」や「断りづらい」などである。一見したところ、前者(「断ると(おそらくは相手に)悪いから」)は、相手が直面するかもしれない心的落ち込みに対する思いやりを示しているようだが、相手のそうした反応を確認できる材料が



あるとは限らない。「断ると悪い」が証拠不在の察しであるなら、それは「断りづらい」とした理由同様に、日本人のコミュニケーション特徴として指摘され続けてきた「対立を避ける」姿勢の表出、より厳密には自分に対する大小の批判や攻撃の種を相手の心に蒔かないための工夫であった可能性も否定できない。

さらに、これらあわせ行為のもう一つの特徴は、相手に対する配慮がややおおげさに表現されることである。LINE メッセージのやりとりでは、共感の度合いを操作することが容易だからであろう。特に「やりすごし型のあわせ」では、数多くの感嘆符（！）や絵文字が利用されていた。その場限りのやりすごしであればこそこの現象といえなくもないが、たとえばAのメッセージは、やりすごしを大きく遊離して、むしろ相手の気持ちになってメッセージを書いているような印象すら受ける。実際、Aは「相手の気持ちにのっかりたくて」5つの感嘆符をつけたと報告していた。

また、Bは友人の感想には納得できなかったとしながらも、あえて「激しく同意」のネット用語を用いて友人の感想に共感を示した。ここでは自分の気持ちに寄添ってくれた友だちへの感謝と同時に負い目ともいえる感情が、あわせ表現を肥大化させるという興味深い現象がおきているようであり、またそれは、少数ながら「自己犠牲型のあわせ」にもみられた。たとえば以下のような事例もある。

<E> 友だちから紹介されたレストランはそれほど気になるところではなかったが、(紹介してくれたので)「わ！ここうちもインスタで見たことある！美味しそう🍷ここにしょっか！！」とあ寄せた。

Eのあわせメッセージが思いやりの結果であれ、対立を避けるための工夫であれ、それをうながしているのは、Bのケースと同様に自分のために労を取った友人に対する感謝と負い目である。Eは結局それほど興味の湧かないレストランで食事をするという自己犠牲を払うことになるが、むし

ろ、それを引き込むようなメッセージを送っている。

### 権力格差（対象：上司や先輩など）

#### ① やりすぎし型のあわせ

<F> バイト先の上司から将来は大型犬を飼い、子どもとともに成長させたいがどう思うかと聞かれた。（同意を求められたと思い）「良いですね！人と犬の絆が生まれる感じですよね！」とあわせた。

#### ② 自己犠牲型のあわせ

<G> 職場の先輩から大晦日にバイトのシフトを変わって欲しいと依頼された。（断りづらかったので）「わかりました。入ります！」とあわせた。

<H> バイトは休みの日だったが突然上司から連絡が来て、今日来てほしいといわれた。（その日は丸一日休みで、外の天候も悪かったためなるべく外に出たくなかったが、次の週に休みをもらっていたので断りづらく）「勤務可能です」とあわせた。

調査の対象が大学生による LINE メッセージであったこともあり、権力格差を動機とするあわせメッセージは相対的に少なく11件のみであった。そのうち10件が自己犠牲型である。GやHのように、その多くはアルバイト先の上司や先輩からの依頼に対応したものである。一方、ここでも断りづらさが理由にあげられることが多かった。Hには翌週に休みをもらっているという負い目があった。

Gについては、断りづらさの背景が示されておらずメッセージの正確な解釈は難しいが、一つには経験不足があげられる。「成人」として社会生活の第一歩を踏み出したばかりの大学生にとって、社会的上位者の依頼や要望を断るのは容易なことではない。また、もう一つはHと同様に負い

目を感じている可能性も否定できない。すなわち、こうした業務シフトの交代を彼女自身が誰かに依頼した経験がある（あるいは近い将来その可能性のあることを見込んだ）との推測も成り立つことだろう。このように考えると、Gが文章の最後に感嘆符をつけた理由も理解できる。

ただし、権力格差を動機とするあわせメッセージでは、感嘆符や絵文字使用による強調はむしろ控えめであり、たとえばHのように記号や絵文字がまったく利用されないものもあったことには留意が必要である。やりとりの相手を含むコミュニケーション文脈にもよるが、記号が抑制されたLINEメッセージの裏側には、いくばくかのためらいやささやかな抵抗が隠されている可能性がある。

#### 関係の安定的維持（対象：家族）

##### ① やりすぎし型のあわせ

<I> バイト先の様子を見にきた来た母から「今日、混んでたね！」とメッセージがあった。（混んではないかと思ったが）「ちょっと混んでた！」と返信したところ、母から再度「あれはちょっとなの？」といわれ、（母の気分を損ねないように）「いや混んでた」とあわせた。

##### ② 自己犠牲型のあわせ

<J> パソコンを貸してと依頼する姉に、一旦断りのメッセージを送ったが、「あなたのパソコンの方が軽いじゃん」といわれた。（断ると絶対喧嘩になるから）「あ～、確かに」とあわせた。

<K> 母からスーパーでの買い物を頼まれた。（その時は用事があり、本当は買い物に行く時間はなかったが、いつも私が頼んだことはしてくれる母の頼みは断れないと思い）「いいよー」とあわせた。

安定的関係にある家族へのあわせメッセージに特徴的なのは、気働きに

みられた「相手の気持ちにのっかりたくて」(A)のような理由が見当たらないことである。心理的に最も近い距離にある家族とのメッセージ交換では、必要以上に相手に寄り添ってみせることはない。近親者への言語・非言語による過剰な共感、むしろ相手の不信感を招くことすらあろう。同居している場合は、なおさらである。そのためか、やりすごしのあわせメッセージであっても記号・絵文字の利用頻度や数は友人や知り合いに対する気働きに比べて減少傾向にある。

また、自己犠牲型の多くは、家族からの批判や攻撃、予想される大小の対立をかわすことを主たる目的にしていた。しかも、女子大生の場合LINEメッセージの交換をしているのは、圧倒的に母親が多い(父、姉、弟がそれぞれ1件のみ)。発達心理学の研究では、高卒後から20代後半頃までの半自立・半依存的時期は「成人生成期」と呼ばれ、女性は特に母親への依存性を保ちながら自立する独自のプロセスを踏む(水本, 2019)。大学は若者たちが大人としてのアイデンティティを形成する初期段階にあり、家族からの精神的自立も進むが、若い女性と母親の関係性をめぐる視点からは、「私が頼んだことはしてくれる母の頼みは断れない」(K)という相互依存的関係のなかで、「母の気分を損ねないよう」(I)注意深く自立が図られているといえるだろう。女子大生にとって、家族、特に母親は、依然、重要な精神的基盤となっている可能性がうかがえる。

#### [結果のまとめ]

女子大生のLINEにおけるあわせ行為は、その時々「会話」を楽しくまた穏やかに継続(または終える)ためのやりすごしと、あらかじめ自己犠牲が想定されたものに分かれていた。これら2種のあわせ行為はその動機や対象となる相手との親密度によらず生起しており、その裏側にはコミュニケーション相手に対する負い目の感覚が存在しているようであった。また、友だち・知り合いに対するメッセージには感嘆符等の記号が多用され、あわせが誇張されていた。この傾向は「やりすごし型のあわせ」

に顕著であり、対象も親友からバイト先の知り合い程度まで幅広い。記号を用いておおげさに共感を示すことが仲間への配慮であり、また、良好な関係を維持する上で必要なあわせのスキルであることが示唆される。一方、家族が対象となる場合のメッセージ交換の相手は圧倒的に母親であり、また、娘は思いのほか母親の顔色をうかがっている。母親との関係が女子大生の自立プロセスに影響を与えていることが暗示される結果だが、これは母親へのあわせ行為に自己犠牲型がより多くみられた一つの重要な理由ともいえるだろう。

#### 4. おわりに

本論では、日本人の対立回避傾向を支える文化的コミュニケーション行為の可能性として「あわせ」を取り上げ、探索的に検討した。かつて Ishii (1984) は話し手の遠慮によって減量化されたメッセージは、聞き手の察しによって解釈されると考えたが、その実態は不明瞭なままに据え置かれてきたからである。現在の社会情勢や人びとの暮らしぶりを考えると、察しが機能しているとは考えにくく、また、そもそも日本人のコミュニケーションを特徴づける能力とするには、材料に乏しい。女子大生の LINE メッセージをみる限り、彼女たちは隠された相手の本心やおもわくを察するというより、むしろ言語化された相手の意向にあわせていることがわかる。同時にこうした行為も日本人に顕著とはいえず、たとえば英語圏に存在する白い嘘と類似性が高い。ただし、あわせと白い嘘はそれぞれ文化の影響を受けて、コミュニケーションにおける社会的な位置づけや、人びともたらす感情等が異なる可能性がある。

一方、あわせの実態として今回取り上げたのは女子大生の LINE メッセージのみであったことから、結果の安易な一般化は避けなくてはならない。また、行為の動機として参考にした Hart (2020) の区分のうち、「気働き」と「関係の安定的維持」はその境界が必ずしも明瞭とはいえない。

今後の課題として、動機区分の再設定等を検討する必要があるだろう。さらに、系統的自己観察という調査方法<sup>7)</sup>に照らして、過去のLINEメッセージを振り返るといった手法の妥当性についても検討の余地があると考えられる。

## 【注】

- 1) 察し能力にかかる実証的研究は、小山・池田（2011）「遠慮・察しコミュニケーション尺度の作成」、小山・池田（2014）「日本人と韓国人の対人関係観の違い：『遠慮・察しコミュニケーション』の枠組みから」、小山・池田・池田・三好（2016）「『遠慮察しコミュニケーション』に関する異文化間比較：日本、中国、米国の大学生を対象として」などがあるものの十分とはいえない。
- 2) 会話分析では、コミュニケーションの最小単位として「隣接ペア」と呼ばれる重要な概念がある。自然に生じる会話のなかで、一人の発話者が「A」といえば、もう一人の発話者が「B」と答える、あるいは「B」と答えることが期待されているため、「A」→「B」のセットで考えられるコミュニケーションの単位である。
- 3) Hart（2020）によれば、大多数の人（95％）は一週間を通して少なくとも一つも嘘をつかずに過ごすことはできない。人は生涯、価値観の異なる他者ととも的人生を送るのであり、時に方便としての嘘をつく必要にせまられるのは自然なことである。
- 4) Forbes Japan（Marisa Dellatto（2021/12/16）「宗教離れ進むアメリカ、キリスト教信者は10年で12％減少」〈<https://forbesjapan.com/articles/detail/44911>〉（閲覧日2022年5月20日）によると、自らをキリスト教信者と自認するアメリカ人は2011年は75％、2021年で63％である（ピュー研究所）。記事タイトルにあるようにその数は減少しているものの、アメリカは長くキリスト教の影響を受けてきた国であることがわかる。

- 5) たとえば、Erat,S. & Gneezy,U. (2012) のWhite Lies、Bryant, E. (2008) の Real lies, white lies, and gray lies: Towards a typology of deception、L.Jampol & V.Zayas(2018) の Gendered White Lies: Women Are Given Inflated Performance Feedback Compared With Men、Broomfield,K.A.(2010) の Children’s understanding about white lie など。
- 6) 文節の末尾をあげて、疑問形のように話すことである。1990年代に女性を中心に広がったとされている。
- 7) 系統的自己観察法を考案・提唱したロドリゲス・ライヴ (2006) によれば、この観察方法はイベント随伴的である。インフォーマントは注意力を高めたまま「ある特定のイベント」の自然発生に注目し、イベント観察後には「ただちに」報告を書くように求められている。

#### 【引用文献】

- 池内裕美(2020). 「苦情の現状、メカニズム、そして実践～リスクマネジメントしての苦情対応～ (その1)」『人事院月報』5月号, pp.8-13.
- Ishii, S.(1984). Enryo-Sasshi communication: A key to understanding Japanese interpersonal relations. *Cross-Currents (Journal of Language Teaching and Cross-Cultural Communication)*. 11(1) : 49-58.
- 石黒武人(2006). 「多文化関係における日本のコミュニケーションの可能性 — 「察し」に内臓された肯定的側面—」『多文化関係学』3 : 151-160.
- 稲増龍夫(2008). 「KYとは」(コトバンク) 朝日新聞出版「知恵蔵」WEB版 <https://kotobank.jp/word/KY-183275> (閲覧日2022年9月25日).
- 大橋理枝(2006). 「縦型／横型一個入主義／集団主義の性差・地域差・年齢差について：放送大学生の場合」『放送大学研究年報』24 : 93-100.
- 小川一夫(1995). 『改訂新版 社会心理学用語辞典』北大路書房.
- Oxford English Dictionary (デジタル版). <https://www.oed.com/view/Entry/420925?redirectedFrom=white+lie#eid> (閲覧日2022年9月15日).
- 刈谷剛彦(2017). 『オックスフォードからの警鐘：グローバル化時代の大学

論』中央公論新社.

桑本裕二(2013). 「若者ことばにおける曖昧表現の形態および意味構造の変異について—テレビドラマのデータベースの通時研究への利用を目指して」『秋田専高研究紀要』49：68-75.

JA com 農業協同組合新聞(2020). 「農業従事者 5年で46万人減 49歳以下8.5万人減 新規就農定着へ検討会—農水省」 <https://www.jacom.or.jp/nousei/news/2021/04/210428-51026.php#> (閲覧日2022年9月12日).

総務省統計局(2020). 「労働力調査(基本集計)2020年(令和2年)平均結果の要約」 <https://www.stat.go.jp/data/roudou/rireki/nen/ft/pdf/2020> (閲覧日2022年11月22日).

高野陽太郎(2008).『集団主義という錯覚—日本人論の思い違いとその由来』新曜社.

辻大介(1996). 「若者におけるコミュニケーション様式変化：若者語のポストモダニティ」『東京大学社会情報研究所紀要』51：42-61.

新村出編(2018).『広辞苑 第7版』岩波書店.

Hart, L. Christian (2020). The Nature of Deception : What Is a White Lie? Certain features distinguish white lies from big lies. Psychology today (Posted October 28, 2020) <https://www.psychologytoday.com/us/blog/the-nature-of-deception/202010/what-is-white-lie> (閲覧日2022年5月12日).

橋本健二(2000). 「第5章 戦後日本の農民層分解と農業構造の転換1」原純輔(編)『近代化と社会階層』東京大学出版会, pp.109-134.

Hall, E.T.(1976). Beyond Culture. New York: Doubleday.

ホフステード, G.・ホフステード, G.J.・ミンコフ, M. (2013). 岩井八郎・岩井紀子(訳)『多文化世界—違いを学び未来への道を探る 原書第3版』有斐閣.

水本深喜(2019). 「青年期から成人期への移行期にある女性の母親との関係の発達的变化—精神的自立と親密性の視点から—」『青年心理学研究』30：115-129.



ロドリゲス, N.・ライヴ, A.(2006).川瀬康至・田中敦訳『自己観察の技法』  
誠信書房.

山岸俊雄(1990).『社会的ジレンマのしくみ：「自分一人ぐらいの心理」の  
招くもの』サイエンス社.